

「本っておもしろいな!!」

わいわい文庫を利用して、4年生の彼が、一冊の本を一人で読み切ったときの言葉です。文字を読んだり書いたりすることに困難さのある彼にとって、図書の時間は、挿絵を見て過ごす、退屈で長いづらい時間だったと思われます。

彼が最初に読んだ本は『おとうさんはウルトラマン』。100冊以上入れてあるタブレット端末から、「これを読みたかってん!」と躊躇なく選びました。

タブレット端末を見つめる顔は、なにやらにやけていて、時折大きな声で笑い、気にいった場面を何度も何度も再生していました。

後日、保護者から伺った話によると、この本は何回も何回も学校から借りてきていたそうです。

「字が読めないのにどうするんだろう」と思われていたそうですが、ある日、本の内容を嬉しそうに語る彼を見て驚かれたそうです。わいわい文庫を利用した後のことでした。

「先生!貸してください!」と図書の時間の前に、彼がタブレット端末を取りにやってきます。

もう図書の時間は、挿絵を見て過ごす、退屈で長いづらい時間ではありません。イヤホンをつけ、タブレット端末を机の上に置き、時にはにやけて、時には真剣な顔で読書に没頭しているそうです。

返ってきたタブレット端末を見れば、今日はどんな本を読んだのかがわかります。「ああ今日は、前の続きを読んだのか」とか、「おお、ページの多い本に挑戦したのか」など、それを確認することが私の楽しみとなりました。

【読書=字がいっぱい。読めない。意味が分からない。=拒否】になっていた彼が、読書の楽しさに引き込まれていくのが手に取るようにわかりました。

今度は「他にもっとおもしろい本ないの?」と言う、彼の言葉が聞きたくなりました。